

三浦半島巡検

松山 薫

1990年10月13日（上）、式先生の御指導のもとに三浦半島中部東岸地理学巡検が行われた。三浦半島中部における環境の変化とそれに対する対応を、農村、漁村、港町に於ける特色からみることに、更にそれぞれの自然的基盤、特に地形について考察すること、これが今回の巡検の目的であった。

まず最初に訪れたのが横須賀市南部の津久井・牛込地区の観光農園である。牛込集落センターで観光農園組合長のかたにお話を伺ってから実際にみかん園の中を見せて頂いた。武山断層の南側であるこの場所は広々として日当たりも申し分なさそうである。昭和38年に国の補助を受けて本格的にみかん園造成を始めて以来、石油危機、みかんのだぶつき等の浮沈はあったものの、京急電鉄線（津久井浜まで開通したのは昭和37年）とのタイアップも成功しここまで成長したのだという。お話を聞きながらたわわに実るみかんを横目で見つめ、園内をひとめぐりした。そのあとで先生が御馳走して下さったこの農協の100%濃縮みかんジュースは非常に美味であった。

次に京急長沢駅へ電車で移動し、そこから三浦海岸へ出て壮年期の沈水海岸線を観察した。三浦半島を地図で見ると、その海岸線は殆どが入り組んだ沈水海岸線を示しているが、例外的にこの三浦海岸と半島の反対（西）側の小和田湾沿いには比較的長く平滑海岸線が続いていることがわかる。三浦半島はその大部分が第三系の丘陵を主体として形成されているが、北を前述の武山断層、南を南下浦断層に境される部分には第四紀のやわらかい洪積層からなる宮田層（下末吉面に対比）が、葉山層群を胴切りする形で地溝をなしており、これらの海岸線はこの宮田層の分布に対応しているのである。削られた宮田層が再堆積したものだという粗っぽい砂が印象的であった。また、海岸近くには長岡半太郎記念館・若山牧水資料館が在り、この地にゆかりの深いこの二人の人物についていろいろと知る事ができた。明治の末から昭和の初期にかけて、この辺りは風光明媚、気候温暖なことから別荘地となっていたというが、かつて

四軒しか家がなかったという京急長沢駅前は、今や1300戸もの住宅団地が立ち並び、すっかり京浜地区のベッドタウンと化している。京急長沢駅の西南を通る武山断層を眺めつつ、昼食をすませた私達は次の見学地の久里浜へと再び電車に乗った。

久里浜では平作川周辺の景観を見た。平作川の沖積入江性三角州は江戸時代に新田開発が行われており、その記念碑が夫婦橋という平作川に架かる橋のもとに在った。また、この夫婦橋の右岸上流側に小さな漁船が沢山繫がれていた。ここは実は久比里港といい、かつてはここが平作川の河口であったのだが、周囲の干拓により河口が遠さかってしまい、かくして港だけが川の中に取り残されたのだそうである。何とも面白い光景であった。

夫婦橋からバスに乗り、本日最後の見学地、浦賀へ向かった。沈水海岸線の深い湾入部が古くから港として利用され、享保8年に奉行所が置かれてからは海の関所として賑わい、明治以降は造船の町としてその名を知られた浦賀。今回地元郷土史家のかたに案内して頂いた西浦賀は、古い物が好きな私のような人間にはこたえられない魅力で溢れていた。1760年に建てられたという商家、今も使われている古い塩の倉庫、西叶神社の壮麗な木彫、常福寺の庭園、墓碑や奉納物に留められた江戸時代のいわくある人々の名、何処からか「関東甲信越小さな旅」の主題曲が聞こえて来そうな町並。何より気に入ったのは時を忘れたようにひっそりところという古いものたちを伝えているこの町の雰囲気であった。これもまた地形や歴史的要因の所産といえるであろう。が、周囲の丘陵上には既に大規模な住宅地が広がっていることも同時に知った。異様に乗り心地の良い京急快速特急のシートに身をうずめ、ここも京浜地区の通勤圏なのだなぁと実感しつつ帰途についた。

そのほか、ここに書ききれない程沢山のことを学んだ今回の巡検であったが、おおまかなところを個人的感想と共に記させて頂いた。

（10月13日式教官指導）